

STAND UP SUMMIT 2014

～若者たちによる未来復興デザイン～

株式会社 東京ビッグサイト

交流協会では日台交流に有意義な催しに後援名義を付与する形で協力しています。本事業は、将来に亘る復興を引き継ぐ日本と海外の若者達が世代や地域の壁を乗り越えて、多角的に復興と日本の行く末について考えをぶつけ合い、針路を見いだす有意義な催しでした。この催しには交流協会奨学金留学生に参加協力を得、1999年の台湾大地震での被災経験と、東北大地震への支援の点という被災者・支援者の立場から有意義な意見が出されました。

イベント概要

2014年8月11日(月)、株式会社東京ビッグサイトは、東京都ならびに特定非営利活動法人次代の創造工房との共催により、東京ビッグサイト会議棟において、復興支援イベント『STAND UP SUMMIT 2014 未来は自分たちで創っていく!～復興のソコヂカラ in 東京ビッグサイト～』を開催しました。本イベントは「未来は自分たちで創っていく!」という想いのもと、東北、東京、海外の学生313名が集い、復興支援活動に従事する自治体、団体、さらには各界のプロフェッショナルとの交流を通して、復興の道しるべ、日本の道しるべを考え、発信していくことを目的に実施したものです。

本イベントプログラムは「オープニングセレモニー」、「TSUNAMI ヴァイオリンと12人のヴァイオリニストコンサート」、「パラリンピアン佐藤真海トークショー」、「未来(あした)への道1000km縦断リレー活動報告」、「イーサン・ボートニック特別コンサート」、「Stand Up プレゼンテーション」、「Stand Up ディスカッション」、「グランドフィナーレセレモニー」、ブース・パネル展示等、盛りだくさんの内容となりました。

また、参加学生向けプログラムは、自分のミラ

イを考える4つの『ワークショップ』と、復興のミライを考える8つの『セッション』を実施しました。

8月10日(日) 14:00～17:00

前日ミーティング

STAND UP SUMMIT の前日から中高生・大学生向けイベント参加者の一部は、ワークショップあるいはセッションのグループに分かれて、顔合わせと事前準備を開始しました。自己紹介を行うとともに、グループごとに参加動機や将来の夢、今後の東北や日本に望む姿などの話し合いを持ち、中には、防災士をゲストに招いて、防災カードゲームを使って防災意識の再確認を行ったグループもありました。

自分のミライを考えるワークショップは、①画家の井上文太さんによる「デザインのチカラ」、②ロボットクリエイターの古田貴之さんによる「科学技術のチカラ」、③シンガーソングライターのイーサン・ボートニックさんによる「音楽のチカラ」、④料理家の三國清三さんによる「フードのチカラ」の4つ、復興のミライを考えるセッションは、①三陸鉄道による「鉄道」、②特定非営利活動法人GRAによる「農業」、③一般社団法人福島復

興ソーラー・アグリ体験交流の会による「自然エネルギー、人材育成」、④公益財団法人さわやか福祉財団と釜石復興応援地域通貨平田どうもの会による「地域コミュニティ」、⑤ RISK WATCH による「防災教育」、⑥ TOKYO FM による「メディア」、⑦ みずほ銀行による「産業育成」、⑧ HABATAKI PROJECT による「グローバル」の8つのグループに分かれて、前日ミーティングが実施されました。

8月11日(月) 10:30～ オープニングセレモニー

東京ビッグサイトに国際会議場にヴァイオリンの調べが響き渡り、STAND UP SUMMIT が開会しました。東北、東京、海外を代表して、3名の学生が開会を宣言。世代や地域を超えて若い自分たちが交流を担い、より良い未来への一歩を踏み出していきたいというメッセージが伝えられました。



開会宣言

また、共催者である東京都総務局次長の中村長年氏からは、「復興について参加者に大いに議論を深めてもらい、東京都が復興支援を行う際の参考としたい」との挨拶があり、弊社代表取締役社長・竹花豊も「東京ビッグサイトを舞台に、一人ひとりが主役になり、熱い議論を展開してほしい」とエールを送りました。

11:00～ TSUNAMI ヴァイオリンと 12人のヴァイオリニストコンサート

TSUNAMI ヴァイオリンとは、東日本大震災で発生した津波の流木でつくられたヴァイオリンです。一般財団法人 Classic for Japan は東北の故郷の記憶や思い出を音色として語り継いでいくために、流木をヴァイオリンとして再生しました。ヴァイオリンの魂柱には陸前高田の「奇跡の一本松」の木片が使われ、裏面にはその姿が描かれています。

このヴァイオリンを使って、“カノン”、“プリンスメドレー”、“ツイゴイネルワイゼン”の3曲を披露したのは「12人のヴァイオリニスト」です。12人のヴァイオリニストとは、ヴァイオリニストの高嶋ちさ子さんがプロデュースした“観ても、聞いても、美しく、楽しいヴァイオリンアンサンブル”で、被災地において数多くのコンサートを行い、元気を届けています。

11:15～ パラリンピアン佐藤真海さん トークショー

主に走り幅跳びを競技種目として、日本記録とアジア記録を持つパラリンピック選手の佐藤真海さん。2020年の東京オリンピック・パラリンピックのプレゼンターをつとめたことでも有名な佐藤さんが、スポーツアナウンサーの深山計さんとのトークショーで、大学在学中の骨肉腫の発症からパラリンピアンとして再起、会社員、競技選手のほか、障害者スポーツ振興に携わるまでの過酷な半生を、穏やかにそして力強く語りました。スポーツによって救われた佐藤さんだからこそ実感できる「スポーツは夢と希望を与えてくれる。人々を結びつけてくれる」というスポーツのチカラが会場に届いたものと思います。

12:30～ 未来(あした)への道1000km 縦断リレー活動報告

会議棟1階のレセプションホールでは、「TSUNAMI ヴァイオリンと12人のヴァイオリニストコンサート」に引き続き、東京都オリンピック・パラリンピック準備局課長の根岸潤さんから、2014年7月24日(木)～8月7日(木)にわたって実施された「未来(あした)への道1000km 縦断リレー2014」の活動報告がありました。このイベントは、青森から東京まで、東日本大震災の被災地をランニングと自転車をつなぐリレーの開催を通して、復興へ向けた取組等を発信し、東日本大震災の風化を防止するとともに、全国と被災地との絆を深めることを目的に実施されたものです。

13:00～ ワークショップ&セッション WORKSHOP デザインのチカラ

『未来をデザインする授業』として、日本画・油彩・キャラクターデザイン・空間美術などを手がける井上文太さんによるワークショップが目指したものは、創作の喜びを感じることによる精神の復興です。「なぜ、絵を描くのか?」「絵を描くことで心が輝くから」という井上さんのメッセージは明快です。そして協同の大切さ。どんなことも、一人ではできない。想像した通り、予想通りには決して行かない。それでも正直に、誠実にやっていたら、必ず見ていてくれる人がいる。そうした想いを共有し、ワークショップでは、STAND UP SUMMIT のロゴマークをモチーフとしたモニュメントの制作を行いました。

WORKSHOP 科学技術のチカラ

『ロボットの授業』の中で千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長の古田貴之さんがワークショップで繰り返したのは「技術をどのように使用するのが大切」ということでした。原

子力発電所のように人間が入ることが難しい場所での作業や、パワードスーツのように人の機能を支援する技術。科学技術は人々を幸せにするチカラであることが強調されます。そして挑戦する気持ち。「できるかどうかを考えるよりも、どうしたらできるようになるかを考えることが重要です。できるかどうかを考え始めたら、大体、人間はあきらめてしまいます」とも。参加した生徒・学生たちは、さまざまなロボットの動画を見た上で、実際にロボットを操作、科学技術の力を感じていました。

WORKSHOP 音楽のチカラ

「I believe that anything is possible. 自分を信じて、奇跡は起きる。自分を信じて、全て叶うよ」。13歳のイーサン・ボートニックさんは最年少チャリティ活動家としても評価を受けるピアニスト・シンガーで、今年4月には東北福祉大学(仙台)や東京でチャリティーコンサートも行いました。彼のワークショップの目標は『東北復興のためのテーマソング作り』で、ケツメイシやFUNKY MONKEY BABYSなどをプロデュースした音楽プロデューサーのYANAGIMANさんとともに、ワークショップ参加者の歌詞にイーサンさんの曲を合わせて、3時間でテーマソング『STAND UP』を完成させました。



WORKSHOP 音楽のチカラ

WORKSHOP フードのチカラ

洋食料理家の三國清三さんが『味覚の授業』で伝えようとしたものは、『甘味』、『酸味』、『塩味』、『苦味』、『うま味』の五味が人間を形成し、味覚が心を育てるということです。味覚の発達が完了する12歳頃までに五味を体験することで、五感が発揮されるようになり、相手の心や気持ちをキャッチする力が獲得されるということでした。ワークショップでは五味を試した後で、それぞれの食材を当てるといった体験型クイズも実施しました。

SESSION 1 鉄道

三陸鉄道株式会社の赤沼善典さんより三陸鉄道の紹介と、東日本大震災による被害状況の説明を受け、セッション参加者が映像で津波の威力を再認識しました。これらを踏まえて2つのグループに分かれて、震災からの復興に向けたアイデアが議論されました。「食、景色などの魅力を伝えるために、一次産業を見直し、若者の意識改革を図る」、「身近な人々に震災の悲惨さを伝え、今あるものを大切にしていく」、「ひとりひとりが興味・関心のアンテナを張り、思ったら即行動に移そう」。震災の記憶を風化させないことが何より重要だとの想いを参加者が共有するセッションとなりました。

SESSION 2 農業

NPO 法人 GRA の稲垣亮太さんをアドバイザーとして、『農業×○○で東北の未来を考える』と題して、「アイデア100本ノック」という課題が出されました。「農業を盛り上げるのは若者の力。スマートフォンやSNSを使って若者の農業に対する興味を高めよう」、「ダイエットと組み合わせ、農業の健康面をアピールし、海外から人を呼び込んではどうか」。「農業×スマートフォン」、「農業×ダイエット」、「農業×国際交流」などの切

り口から、農業を起点とする復興の視野が広がることに参加者が気づくきっかけとなるセッションとなりました。

SESSION 3 自然エネルギー、人材育成

一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会の半谷栄寿さんから、南相馬ソーラー・アグリパークの事例の紹介がありました。この施設は、太陽光発電所と植物工場を舞台とした体験学習を通じて、地元の子供たちの成長を支援し、南相馬をはじめ福島の復興を支える人材を育成する、「復興の拠点」として設立されたものです。



自然エネルギー、人材育成

「復興を進めるためには、多くの人を巻き込むこと。自分たちと同じ若い世代を誘い、参加しやすい環境づくりをすること」。復興を進めるために、人々を巻き込む仕組みづくりの大切さが強調されたセッションとなりました。

SESSION 4 地域コミュニティ

公益財団法人さわやか福祉財団の中澤将人さんと釜石復興応援地域通貨平田どうもの会、2団体のセッションアドバイザーとともに、生徒・学生が「助け合い」について考えたセッションです。まず実施した地域通貨をもとにした体験ゲームでは、最後に手元に残ったカードが一番多い人は「助け上手さん」、また一番少ない人は「助けられ上手

さん”となります。「助けることは簡単だが、助けを求めることは勇気がいることだと思った」、「助ける側と助けられる側の双方が、助け合いによってプラスのものを得ることができる」。助け合いによる交流の効果が実感できるセッションとなりました。

SESSION 5 防災教育

米海軍横須賀基地消防隊における20年超の経験を活かして、防災教育の指導に取り組むリスクコミュニケーター・長谷川祐子さんをアドバイザーに、東日本大震災の津波被害のような、大規模被害を未然に防ぐためのマニュアルづくりが行われました。「既存の防災マニュアルは情報量が多く、誰も読みたがらない。シンプルで大切な情報のみを入れた総合的なマニュアルを目指した。情報をそぎ落とす作業は大変だったけれど、5つの簡単な項目に分類することができた。また日本語と英語が飛び交うセッションは楽しかった」。防災のために本当に実施可能な施策とは何かという視点にたったセッションとなりました。

SESSION 6 メディア

アドバイザーのTOKYO FM古賀涼子アナウンサーからセッション参加者に、「震災のあと、どんな言葉に励まされたか?」、「言葉は復興の役に立つのだろうか?」との問いかけがなされました。「例えば『がんばっぺ』という言葉。震災のあと、揺れを感じると不安になったが、母に背中をさすられ『大丈夫だよ、がんばっぺ』といわれ心強く感じた」、「言葉では壊れた建物を直したり、被災地に食料を運んだりすることはできません。でも言葉は相手の心に自分の気持ちを伝えることができます。気持ちが伝われば人は笑顔を取り戻せます」。人と人をつなぐ架け橋としての言葉の力、心の復興を考えるセッションとなりました。

SESSION 7 産業育成

企業再生や再生可能エネルギー、農林漁業の第6次産業化など、金融機能を活用した復興支援を行っているみずほ銀行の中居浩一さんをアドバイザーに、今後東北で誕生・育成が期待される産業について議論が交わされました。「東北では雇用を生む産業が一番必要。今後伸びてくる産業として自動車産業と医療機器産業について注目しました。東北には高い技術力を持つ中小企業が多くあります。団結すれば大きな企業に匹敵するはずだ」、「東北の産業を強くしていくために、重要となる医療・食品産業の育成について学んだ」。経済活動の復興における、金融機能の役割について考えるセッションとなりました。

SESSION 8 グローバル

インドネシア共和国、エルサルバドル共和国、スーダン共和国、チリ共和国、ニュージーランドの各大使館と、日本赤十字社、東北福祉大学、一般社団法人International Women's Club Japan、Support Our Kidsといったさまざまな団体をアドバイザーに、セッション参加者たちは、災害を乗り越えてきた各国の被災・復興の事例や、復興への課題、防災・減災への取組みを学びながら、日本の復興のあり方を考えました。また各国の課題に対して日本ができるアクションについても検討しました。「海外への支援、海外からの支援は、両国の友好関係という基盤抜きには実現できないことが理解できた。国と国との友好関係は政治家が築くものと思っていたけれど、民間レベルで活動する団体も多数存在し、私たち若い世代にも果たし得る役割を感じる事ができた」。国際協力を身近に感じることでできたセッションとなりました。

15:00～ イーサン・ポートニック特別 ライブコンサート

WORKSHOP 音楽のチカラで講師を務めたイーサン・ポートニックさんによる特別コンサートを国際会議場で行いました。楽曲は、“ALATURLKA”、“What a Wonderful World”、“Rock Around the Clock”、“It’s All About Music”、“We’re All Family”、“STAND UP”、“Anything Is Possible”の7曲。途中から東北福祉大学混声合唱団、WORKSHOPのメンバーが加わり、「おそれている何も始まらない」という東北復興のためのメッセージが、テーマソング“STAND UP”に乗せて届けられました。最後の曲、“Anything Is Possible”はイーサンさんが体の弱い弟のために書いた曲で、この曲に込められた「叶うと信じれば、何でもできる」というメッセージは、復興に取り組む人々を勇気づける内容でした。

16:00～ Stand Up プレゼンテーション

ライブコンサートに引き続き、参加した生徒・学生たちの中から、各グループ代表者が2名登壇して、ワークショップあるいはセッションの感想、内容そして想いを発表しました。プレゼンテー



プレゼンテーション

ションのあとに、ワークショップで講師を務めた三國清三さん、古田貴之さん、井上文太さんに加えて、東京大学教授で日本文学者のロバートキャ

ンベルさんをコメンテーターとして、講評が行われました。

「私が一番伝えなかったことは、味覚が心を育てるということ。しっかりした感覚を獲得して、若い人たちにこれからの社会を切り開いてほしい」（三國清三さん）。「復興とは元気になること。他の人を巻き込む前に、自分がやりたいことをやるのが大切。それが他人に連鎖して、被災地を元気にすることに繋がる」（古田貴之さん）。「楽しいことが一番。失敗はいくらでもすべし」（井上文太さん）。「子供と大人を区別する必要はない。志はみんな変わらない。自分が譲れないものをひとつ決めて動いていけば、力は発揮できる。今日のひらめきを逃さないで」（ロバートキャンベルさん）。

17:00～ Stand Up ディスカッション

ロバートキャンベルさんをファシリテーターに、15人の参加学生と、三國さん、古田さん、井上さんが登壇し、サミットという交流の場で得た「驚き」、「喜び」、「つまずき」、「共感」、「気づき」について議論しました。



ディスカッション

参加者のコメントの一部は以下の通りです。

「東北でも内陸側に住んでいると、震災の記憶の風化が進んでいるように感じます。サミットに参加して、さまざまな震災復興に対する考えに驚

くと同時に、希望を感じました」、「災害を経験した各国の大使館の方々のお話しをお聞きして、減災力というテーマが印象に残りました。若い世代が考えていかなければいけないテーマだと思います」、「東北からの参加者の体験を聞くと、とても生々しくて、まだ震災は終わっていないんだと実感しました」、「今、東京では、大学生でも震災に関心のある学生が多いとは言い切れません。サミットに中高生といった若い世代も多数参加していることが良かったと思います」、「2016年には岩手県で国体が開かれます。ぜひ、たくさんの人に岩手県に来てほしいです」、「大震災のことを忘れたくないと思っている人がいて、とても共感できました。東京オリンピックが開催される2020年までに、復興について世界に発信できるよう準備をしていきたいです」、「震災はもちろん悲しいことだけれど、新しい出会いや、立ち直りのきっかけが生まれたというプラスの側面も大切にしていきたいです」。

18:00～ グランドフィナーレセレモニー

宮城県石巻市出身の浅田香菜さんが総合司会を務め、グランドフィナーレセレモニーが行われました。共催者である特定非営利活動法人次代の創造工房理事長・秋澤志篤氏のフィナーレスピーチ、弊社代表取締役社長・竹花豊のメッセージの後、イーサン・ポートニックさんが再び登場し、彼のピアノ伴奏により、国際会議場が一体となって、“花は咲く”、“We are the World”を大合唱。最後は東北代表学生による閉会宣言で幕を閉じました。

参加に向けた学生の熱い思い

本サミットが参加学生にとってより実りあるものとなるよう、事前に復興について自分の思いを1枚のペーパーにまとめてもらいました。当日は313名それぞれの思いが込められたペーパーが会

場内に掲出され、会場を訪れた人たちへ若い世代のメッセージが届けられました。今回は海外学生として公益財団法人交流協会よりご紹介いただいた台湾学生の思いを抜粋して紹介いたします。

①あなたが考える復興とは？

復興とは、地域をただ昔あったように復元するのではなく、新たな価値を見つけることにあると思います。今回の地震は多くの人や町を変えてしまいました。既存の社会のあり方に警鐘を与えたのです。しかしこれは危機であると同時に転機でもあります。過去には関東大震災、阪神大震災といった大きな災害がありました。今日においてもその爪あとは残っていますが、人々がそれを乗り越え、新たな未来を目指し、今があります。今回もみんなが助け合って、物的、心理的、社会的により良い未来を共に切り開くことが復興だと考えています。(李祐漢さん)

②東北の復興のために2020年までにあなたができることは？

2020年に東京オリンピックが開催されます。その主催国である日本には、各国の選手や観光客が多数訪れます。それまでに私が東北の復興のためにできることは二つあると思います。

一つ目はボランティアとして実際に東北の復興活動に参加することです。東日本大震災から三年が経ち、今でも様々な復興活動が続いています。町の復興イベントや学校の支援活動に参加し、子供たちとコミュニケーションを取りながら復興に繋がりたいです。

二つ目は、日本の美しさを世界に向けて発信することです。毎年、たくさんの外国人観光客が日本を訪ねています。私は日本と世界の架け橋になるために、外国人として日本で自分の目で見た美しいことや実際に感じた素晴らしいことを世界に伝えていきたいです。言葉や行動を通じ、日本の

良さを世界中の人々に知ってもらうこと、それが東北の復興のために2020年までに私ができることです。(王煒彤さん)

後援・協力・協賛・企画協力

共催団体以外にも多くの企業、団体にご支援・ご協力をいただきました。以下、敬称略・順不同でご紹介します。

【後援】 復興庁／岩手県／宮城県／福島県／アメリカ大使館／公益財団法人交流協会／日本経済新聞社／株式会社読売新聞グループ本社／岩手日報社／河北新報社／福島民報社／TOKYO FM／TBSホールディングス／TOKYO MX

【協力】 一般財団法人 Classic for Japan／GTF グレータートウキョウフェスティバル実行委員会／Support Our Kids 実行委員会／学校法人千葉工業大学／学校法人南光学園東北高等学校／東北福祉大学／日本赤十字社／早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

【協賛】 みずほ銀行／アクアクララ株式会社／株式会社伊藤園／井筒まい泉株式会社／グリーンコア株式会社／サントリー食品インターナショナル株式会社／株式会社サイマル・インターナショナル／デルタ航空／東武鉄道／株式会社ブルボン

／株式会社ムラヤマ

【企画協力】 アゼリーグループ／一般財団法人 International Women's Club JAPAN／インドネシア共和国大使館／エルサルバドル共和国大使館／オフィス・ハイウェイ／公益財団法人さわやか福祉財団／三陸鉄道株式会社／特定非営利活動法人 GRA／スーダン共和国大使館／株式会社ソシエテミクニ／一般社団法人たのしいことする。プロジェクト／チリ共和国大使館／ニュージーランド大使館／HABATAKI PROJECT／釜石復興応援地域通貨 平田どうもの会／ヒーローズエデュテイメント株式会社／一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会／株式会社 RIGHTS.／RISK WATCH



グランドフィナーレ集合写真